# 「国是○○條」等の概要

国是三論(1860)　福井３年目。小楠、由利公正等改革派は、貿易の成功で経済的実績をあげていたが、依然として藩内は改革派と俗論派に分かれていた。藩内の人心一致のために融解は必須条件であり、そのため小楠は、国是三論を作り「講習」を粘り強く行った。翌1861.11.17、大議論の末に藩士は上下なく涙を流し合って融解、藩内の人心一致を実現した。俗論派も嘘のように鳴りを潜めた。それまで、横井小楠の指導のもと、由利公正たちの知恵と柔軟性と行動力で、福井藩は教育と経済の複合的な成功をみていた。貿易の利益は藩の石高の５倍を１年目に、２年目には１０倍もの利益を得、一躍雄藩に躍り出た。小楠はこの成功を裏付けに富国、強兵、士道の三部からなる国是三論をまとめ上げた。それは福井藩だけでなく他藩へも波及した。孝明天皇の信頼が厚かった松平春嶽が幕府政治総裁へ、横井小楠がそのブレインとして幕政改革（国是七条）に取り組む道を開くことになった。小楠の示した越前福井藩のあるべき姿、即ち国是三論の要旨はつぎのとおりである。

【富国論】

藩政は、民を富ませるのが第一である。生産を奨励し、生産に参加することで民自身が富むと分かれば、ぶらぶらして働かずその日暮らしの者たちも生産に参加するようになる。そうすると藩の財政は豊かになる。その豊かさをさらに民に分かつのである。生きていくことさえ汲汲としている人、一人で孤独な生活を送っている人たちにも心を砕くのである。人のやる気を挫くのは、高い税金と容赦ない刑罰である。税も刑罰もうすくすることで、少しぐらいの失敗に縮こまることなく、人は思い切り前向きに働けるようになる。そこに藩の上下の「人心一致」は実現する。

実学を唱える小楠は概念だけに止まらず、講習の機会を設け「富国の具体的青写真」も示した。小楠が「講習」を徹底したのには理由があった。小楠の富国策には、どうしても藩札発行が必要であった。しかし、越前福井藩は天保期から安政期にかけて藩札発行で続けて失敗をしていた。藩札の大量発行により、額面より目減りしたレートで正金引き換えをするはめになり、藩札に対する民の信頼を完全に無くしていたのである。小楠は開国によって外国との貿易が可能となったことに目を付け、藩財政の立て直しの策を編み出したのである。

藩札によって産業振興の資金を貸し出し、生み出された産物を外国商人に売り、正金での支払いを受けるという藩札を正金に変える仕組みである。勿論、いつでも藩札を正金に替えられる藩主保証付きである。長崎において外国商人が欲しがる品々を事前調査、データ化し、それらの産物を生産したり他藩から選んで取り寄せたりして長崎に運び商いをすれば、売上は莫大なものになる。その利益も正金である。取り扱いは長崎に物産総会所を設け、正直で信頼のおける大商人を選定し運営を任せ、私利私欲に走り中間搾取する姦商は排除する。藩庁は利益を藩庫に貯えず、事業の回転にまわす。そうすれば民は潤い、藩は年々豊かになっていく。小楠はそこまで考えて富国策を論じた。

横井小楠は、熊本の塾生たちに、世に成功したかのようにいわれる細川重賢の財政改革を、明かな失敗だと厳しく指摘しており、福井藩の藩士たちにも水戸藩の失敗と合わせて話したことであろう。

「細川重賢の藩財政改革（宝暦の改革）も水戸藩の節倹による緊縮経済対策も藩庫を潤す為の施策で、一時的に藩庫は潤ったかもしれないが、民のひどい貧困を招いた。所詮長続きしないその場しのぎの弥縫（とりくろい）策に過ぎずない。」と。

【強兵論】

国が開かれ、周囲を海に囲まれた我が国は諸外国と海を挟んで接し隣国のようになった。時と場合によっては世界と戦争をする可能性もある。したがって、我が国の強兵策は海軍しかない。幕府が強い海軍づくりに取り組めば、西洋とて恐れるに足りないが、幕府にはそこまで考えが及んでいない。我藩(福井)では、来るべき日にそなえて青少年のうちから訓練をしておく必要がある。

【士道論】

当然のことではあるが、武士の本分は文武両道である。しかし、今の時代には、文は文、武は武と分け、文は文芸、武は武術と別物のように呼び方までも違わせている。それぞれが些末な部分にこだわっていることにほかならない。あまつさえ、文は武をうかつで粗暴だとけなし、武は文を高慢で柔弱だとあざける。武士の本分から云えば、双方とも考えが独りよがりで偏っている。真の文武両道の精神を取り戻すことが大切である。

※中国では、儒学に精通、或いは科挙の試験に合格し官吏としても優れた人物を「士」と呼び、中国の歴史を詳しく学んだ儒学者小楠は、「士」＝「侍」だとは捉えていなかった。

国是七條を幕閣に説明し始める(1862,9,20)。（幕政改革論）　**小楠が列席の幕閣を説得し翌年の将軍の上洛決定**

1 将軍は上洛して、これまで（家光後）の無礼を謝罪すること。　----翌年4/21上洛----公武合体へ
2 諸侯（諸藩主）の参勤を止めさせ、政治報告・意見陳述（述職）に変えること。　----諸侯へ発言力
3 諸侯の家族を地元に帰すこと。　----幕私の改善
4 外様、譜代（身分）にとらわれることなく能力のある者を政官につかせること。　----幕私の改善
5 大いに言論の機会を設け、天下とともに公共の政を為すこと。　----公議政体
6 海軍を興し兵威を強くすること。※(翌年、勝、龍馬へ海軍操練所資金援助)　----富国強兵策
7 相対貿易を廃止して、官貿易を行うこと。　----富国強兵策

※ 破約必戦論（攘夷三策）も幕閣に説明し始めている(1862.9.22)。国是七條の二日後ということから七條と抱き合わせで説明したようだ。

【小楠の思想、考え、状況からその意図は次のように推測される】

将軍が上洛すると、朝廷の勅許なく幕府が通商条約を結んだことが問題になってくる。「攘夷」に固執する孝明天皇、「破約攘夷」を叫ぶ天皇の取り巻きたちが納得できるような具体的解決策も同時に必要になる。とりわけ重要な公武合体の象徴である皇女和宮降嫁の条件として「攘夷」を求められていた。また、破約必戦論は一方的な宣戦布告ではなく、外国が受け入れられるような筋の通る説明でなくてはならない。すでに条約は結んでいる。国の信義に関わる問題で、理由のない一方的な破約攘夷では、理は外国にある。自分から外国に攻撃の口実を与えることにもなりかねない。そこで小楠は、次の策を考えた。

「国の元首は天皇であり、幕府が国交を結ぶことは出来ない。幕府が結んだ条約は無効（破約）とし、改めて天皇のもとに集まり正式に条約を結びなおす必要がある。武力に任せて自己の主張を押し通そうとする国があれば、天皇を中心とした日本国全体との戦い（必戦）になる。」

つまり、日本は仁義と筋を通して平和的解決をしたいが、外国が戦いを仕掛けてくれば、それに応じて、天皇を中心にし日本全体で戦うことになる。外国に対しては日本国全体との戦い、朝廷に対しては天皇を大将にした外国との戦いとなる。双方によく考えるように仕向けるための駆け引きも考えに入れていた。

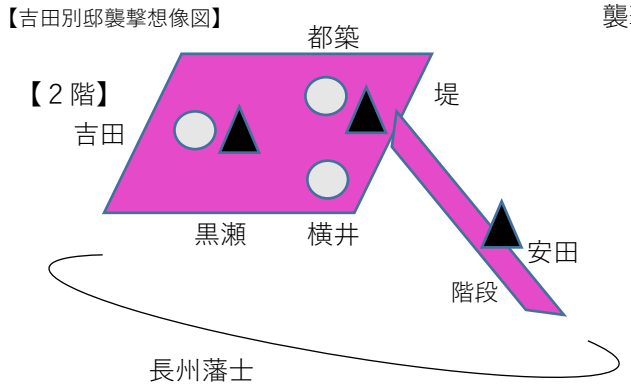
政事総裁春嶽のブレインとして幕政改革に忙しい日々を送っていた小楠に、日ごろから公武合体による政治や外交について情報のやり取りをしていた熊本藩江戸留守居役吉田平之助から手紙が届いた。藩名で京都へ行くことになったので、その前に会いたいという事だった。１８６３年２月７日夕刻、吉田平之助の別邸（妾の家、料亭との記述も）で会うことになった。

この情報は、熊本藩邸詰めの足軽、肥後勤王党に近い安田喜助と黒瀬市郎助から堤松左衛門に伝えられた。**堤松左衛門**は、肥後勤王党の轟武兵衛に文を習い、宮部鼎蔵について武を治め、河上玄斉や大田黒伴雄の志士たちとも親しく交際していた。堤の狙いは**小楠の暗殺で、**二か月前には脱藩し江戸に上がり、長州藩士の所を転々としながら機会を狙っていた。刎頸の友宮部鼎蔵と吉田松陰とのつながりから、肥後勤王党と長州には強いつながりがあった。

ただ、**安田と黒瀬の場合**は違っていて、**狙いは「吉田平之助」**であった。二人は「今日は遅くなる。門限を過ぎたらもう帰らない。その時には、吉田平之助を斬ったと思ってくれ。」と言い残して藩邸を出ている（吉田伝太復仇録）。小楠は、地元熊本では番方として仕事待ちの状態で

あって、塾で細々暮していた。また、江戸では福井藩邸で起居していたので、熊本藩邸で起居する安田、黒瀬は小楠とは面識がなかったと考えたほうが自然である。

【吉田別邸襲撃想像図】




襲撃の状況

刀は部屋の奥に置き酒宴を開いていた。
覆面をした襲撃犯が２人部屋に入った。
階段には襲撃犯（刺客）が一人いた。
長州藩士が家の周囲を取り囲んでいた。

小楠は階段の近くにいて階段を下りた。
**<u>階段の途中で刺客に会ったが、斬りつけられることもなく外へ逃れた。</u>**

※　逃れることができた理由に、「不思議なことに」「機転を利かせて」「頬被りで尻をまくって」などをあげる記述もある。

○　階段の刺客が、吉田平之助をターゲットとして狙っているなら、意識は第一の目的の吉田平之助に集中して、顔を知らない小楠をやり過ごす可能性はある。

○　長州藩士は、「ターゲットは吉田と横井の二人」と聞いていただろうから、刺客である熊本の人間三人の目を逃れてきた人物は、吉田、横井ではないと判断してやり過ごした可能性もある。

小楠は、十町ほど先の常盤橋の福井藩邸へ帰り、大小を受け取り、同藩士十数名を引き連れて現場に戻った。その時には刺客はすでに逃げていた。刀を床の間に置いていたため、素手で刺客と格闘したであろう吉田と都築は負傷していた。都築は、眉の上から右目にかけて斬られていたが軽症で、吉田は、頭のほか右手、股など六ヶ所五十一針縫う重症だった。二か月後、吉田は傷が原因で死亡した。

【刺客のその後】

三人とも長州と行動を共にした。

堤松左衛門は**<u>事件から約３か月後</u>**、京都南禅寺山内で自殺していた。「臣さきに江戸にあるや、売国の奸横井平四郎を斬らんとす、不幸にして事ならず。生をぬすみ今日にいたる、その罪大なり。ゆえに自刃して、もって国家に謝す。」の血書を残していた。**<u>長州人が来て遺体を東山霊山に運び、手厚く埋葬し「南季三郎」の墓碑を建てた</u>**。

安田喜助と黒瀬市郎助は行動を共にしていたが、安田は長州の反対党のため暗殺され、黒瀬は行方不明となった。６年後、偶然四国松山藩で黒瀬が捕縛されたことを知った吉田平之助の長男である吉田伝太が身柄を受け、黒瀬を肥後藩領鶴崎に連れ帰り、龍興寺境内で郡代立ち合いで仇討ちを行った。

熊本藩では、武士道にあるまじき行いとして小楠に責任をとらせる意見が強かったが、春嶽公が責任は自分にあるとして、福井藩にとどめ置くことで熊本藩と話をつけた。

---

◎1863.7小楠書翰(手紙)　「朝廷を総裁にした将軍・藩主や有能な幕臣や藩士で構成する組織をつくる。」

国是十二條を福井藩に提出(1867.2.15)　　※維新後、熊本でも実行

1 天朝を尊び、幕府を敬うこと。
2 賢才を挙げ、不肖を退けること。
3 言路を開き、上下の情を通じること。

4 強兵をはかること。
5 外国と交流すること。
6 天下の治乱にかかわらず、国の独立を以て本と為すこと。
7 風俗を正すこと。
8 学校を興す。
9 士民を仁（いつく）しむこと。
10 信賞必罰を行うこと。
11 富国につとめること。
12 列藩に親しむこと。

新政に対して春嶽(維新政府の議定に就任予定)に建言(1867.12)　※大政奉還は1867.11.9

1 大政奉還と四藩の朝廷補佐について。朝廷の自反自責について。
2 上下議事院の設置について。　（公武合体）
3 兵庫海軍局の開設について。
4 外国貿易について。
条約改正の端緒をきることと国内外の商社の設置について。
5 勘定局の設置について。
6 学校の設置について。
7 刑法の設置について。

「船中八策」1867.7
1 大政奉還・法令は朝廷発
※2 **上下議政局と万機公論**
3 天下の人材登用　**矛盾**
4 外交規約　寄集めか
※5 **古来の律令を折衷**1869.7
6 海軍　**（二官六省）**
7 御親兵
8 貿易の金銀物貨平均

**坂本龍馬が書いたとされる「船中八策(1867.7)」「新政府綱領八策(1867.12)」について**

これらには真贋の問題がある。船中八策についていえば、当時の蒸気船は震動がひどく、その中で書けるのか、書こうとする気分が起こるのか大いに疑念がある。二つとも大体において横井小楠の発言や諸文書からピックアップしてまとめてあるというのは研究者の一致した意見である。

しかし、五カ条の御誓文が龍馬の言葉を参考に由利公正が原案を作ったというのはあり得ない。五箇条の御誓文の文言には、横井小楠の常套熟語がこれでもかと使われているからである。普段、本を読まない龍馬が、御誓文の原案チェックをした福岡孝悌さえ知らなかった「経綸」の言葉を使うことはあり得ない。この言葉も小楠の常套熟語の一つである。

展示会での龍馬の文書については、あまりにも膨大すぎてかえって真贋の疑念がわく。龍馬には一行の文の最後の１，２文字が右に流れる癖があるし（姉への手紙）、当時の外国人、歴史家たちの本や文書に坂本龍馬の名前は一切出てこない。**史実はそんな状況**なのに、現在の一般常識では、龍馬が新政府の構成や人事にまで主導したように解されている（新政府綱領八策等）。当時龍馬は、グラバーと密接な商人の立場であって、新政府に介入することは現実としてあり得ない。" 龍馬は、並外れた英雄的なことをやった人物だ "、「信じなさい」と云われて信じる方が変である。「文書があるから本物だ」というのであるなら、世の中にある贋作はすべて本物になる。

龍馬の業績を云々するなら、まず膨大な文書の真贋証明があってからの話であろう。

**無識による**

**単なる誤まりか、意図的な小楠隠蔽か？**

**1868.6.11「政体書」**について、日本史Ｂ用語集(全歴協)には、*「福岡孝弟と副島種臣が起草」*とある。

**小楠の「新政に対して春嶽に建言」**(1867.12)

1 大政奉還と四藩の朝廷補佐･･･
2 上下議事院の設置について。
3 兵庫海軍局の開設について。
4 外国貿易について。
条約改正の端緒･･と国内外の商社の設置･･
5 勘定局の設置について。
6 学校の設置について。
7 刑法の設置について。

**【政体書】（三権分立）**
総裁（有栖川宮）
行政官
刑法官
議政官
神祇官
会計官
軍務官
外国官
民部官
上局(議定・参与)
下局(貢士※)
※中国：地方の才学ある者の登用

**1868.6.2～**
制度局判事
**横井小楠**

# 「斬奸状」再確認

1869 小楠暗殺の背景を
「斬奸状」に探る

**（柳田直藏が携えていた）**

柳田は、襲撃時にけがを負いその場で
逮捕一週間後に死亡。

≪背景を考える≫

横井平四郎、この者是れ迄姦計枚挙遑あらず候得共、 ----民主政治への諸提言(修正)
姑（しばら）くこれを舎て、今般夷賊（西洋人）に同心し、
天主教を海内に蔓延せしめんとす。 ----小楠の「信教の自由」提言
邪教蔓延致し候節は、皇国は外夷の有と相成り候事顕然なり。 ----脅威に感じるのは誰？
併朝廷御登庸の人を殺害に及び候事、深く恐れ入り奉り候へ共、----朝廷軽視か内通者
売国の姦要路に塞がり居り候時は、前条の次第に立ち至り候故、已むを得ず天誅を加える者也。
天下有志

----「要路」とは神道国家主義への道
（岩倉が小楠を重用＝）
----朝廷が小楠を処断できないから仕方なく天に代わって実行する。
⬆ 朝廷内不満者の声
----「天下」を考えての行動だから

暗殺直前に、小楠は神道国家に真っ向から反対する改革案、即ち五カ条の御誓文に従う民主主義国家の理念による修正案を続々と打ち出し始めていた。それを念頭に、上記の斬姦状を平易な表現に書き換えると、

横井平四郎、この者はこれまで神道国教化の政府方針に反する修正案を続々出してきましたが、
しばらくこれを置いといても、今般は、信教の自由を言い出し、
キリスト教を国内に蔓延させようとしています。
邪教（キリスト教）が蔓延した場合には、天皇の国は外国のものとなることは明白です。
しかしながら、朝廷が登用している人物を殺害することは、深く恐れ入り奉ることですが、
売国の姦（横井小楠）が、天皇中心の国家建設の邪魔をしております今、
前条の次第（殺害）に至りました。
やむを得ず天誅を加えたものです。
天下のことを思う有志

※実行犯6人

| | |
|---|---|
| 上田　立夫 | 石見県（島根県西部）の郷士 |
| 鹿島又之允 | 名古屋藩士 |
| 柳田　直藏 | 郡山藩（奈良県大和郡山）出身 |
| 土屋　延雄 | 備前（岡山）の名主の子 |
| 前岡　力雄 | 十津川（奈良）郷士 |
| 中井刀祢尾 | 十津川（奈良）郷士 |

≪事実≫

※藩がバラバラ
※朝廷内で「助命」活動する者。
※弾正台が「神道」から証拠集めをする。
実行犯は左の者たちだが、裏で暗殺の策謀を練り、指示した「本当の犯人」は朝廷内部の長州人と長州派公卿たち。
**※決定的な証明：「グリフィス記述」**
**信仰の自由が確実になったのは暗殺前日の午後。同時に賤民を市民にすることも確実に。**
**⇦朝廷内部だけの未公開内容**

桂小五郎が「舌剣」と言うほど、小楠の論は鋭い。小楠と桂の話し合いは、刀の柄に手をかけた門弟たちが控え、一触即発のピリピリした雰囲気であったという。最年長であり「経綸」の何たるかを理解し、論客の小楠に勝てるものはいない。ずるずる修正案が出されていったら一番困るの尊皇一番の長州。そもそも神道国教化と五カ条の御誓文の目指す民主主義とは水と油で、混ざり合い調和することは本質的にあり得ない矛盾をはらんでいる。「民主主義の道か否か」の問題。

実行に踏み切らせたもう一つの「隠れた理由」は、賤民（穢多、非人）の身分が市民レベルに引き上げられ、四民平等によって武士の次の身分になることがどうしても許せなかったからとも考えられる。これを斬姦状文言に加えると、百万を超える賤民を敵に回し、一揆の多発は避けられなくなる。政治の安定は根底から覆される。

# 横井小楠暗殺事件を探る　　暗殺の黒幕容疑者　長州（桂）と貴族（三条）

**御所**

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 議定 | 中納言<br>正親町三条実愛 | 右大臣<br>三条実美 | 明治天皇 | 右兵衛督<br>岩倉具視 | 前大納言<br>中山忠能(天皇生母の父) | |
| | 前土佐藩主<br>山内容堂 | 大納言<br>中御門経之 | 前越前藩主<br>松平春嶽 | 大納言<br>徳大寺実則 | 前肥前藩主<br>鍋島直正 | 前阿波藩主<br>蜂須賀茂韶 |
| 参与 | 前長州藩士<br>木戸孝允 | 前越前藩士<br>由利公正 | 前肥後藩士<br>横井平四郎 | 前肥前藩士<br>副島種臣 | 前長州藩士<br>廣澤兵助 | 前土佐藩家老<br>福岡藤次 |
| | 前土佐藩士<br>後藤象二郎 | 前薩摩藩士<br>大久保利通 | 前薩摩藩士<br>西郷隆盛 | 前薩摩藩家老<br>小松帯刀 | ※議定に宇和島藩主伊達宗城の名がない。漏れか？ | |

証拠１　斬奸状にある「今般・・・」と、前日に決まった内部機密であるべき内容が述べられている。

証拠２　Griffis　「The Mikado」　明治の栄光
「信教と賤民の二つの自由を提案して、２４時間も経たないうちに京都でローニンに暗殺・・」

証拠３　Midford　「英国外交官の見た幕末維新」　天皇の権力回復と神道とのつながりについて
「事態を破滅に導く恐れのある何人かの退嬰的な貴族をなだめなければならない・・」

証拠４　政府内に、襲撃犯たちを強くかばう者の存在があった。
※＝会議をリードする小楠に、反論できず押し切られていく者たちのうっ憤の蓄積。

証拠５　襲撃の多藩籍武士
土佐、薩摩、長州は勤皇（尊皇）がさかんだったが、公武合体の動きの中で土佐も薩摩も勤皇派藩士の弾圧を行った。尊皇を唱える他藩の武士たちは、長州に身を寄せるようになる。

証拠６　明治政府の追及調査が始まると、阿蘇神社の宮司が「前夜、投げ込まれた」と、天道覚明（血統否定）説の文書を提出してきた。「詳しく取り調べるから出頭するように」といわれると、「投げ込まれたので、それ以上の事は知らない」と出頭しなかった。　※松陰(長)と鼎三(熊)

証拠7　反幕府派三条実美は、８月１８日の政変（1866)で長州落ち。　※“七卿の長州落ちつながり”

## 日本の歴史を概観する

１　明治維新
W.E.Griffis(滞在M3～M7）福井藩校明進館ー東大（南校：教頭フルベッキ）・勝・春嶽・・）
「神話はまことに豊富なのに、真の歴史書は量も少なく、質も貧弱である。」

２　〇検閲等で隠蔽、隠匿、捏造で削除された事実
昭和20　敗戦
昭和10～20年「検閲」。天皇、万世一系、神道、国学等に関連するものは、特に厳格に検閲。
神風　　「元寇時の大風」を神風と呼んで、神国の証明、象徴としている。
特攻隊　　江戸時代の国学者本居宣長の「敷島の大和心を人問えば、朝日に匂う山桜花」
●３１０万人もの犠牲者と家族の思いを反映させるような、戦争の分析とその結論がない。

【横井小楠を歴史的に陽の当たる場所へ】　　今も続く
**辛子なしの辛子レンコン**

**関口宏・保阪正康さんの「私たちがほとんど知らない近現代史」で始まる番組(BS161 PM0:00～)。「検閲」によって歴史の事実が、隠蔽、捏造、置き換えされた結果、戦後も論理的に筋の通らない歴史を引きずっている。国民が知るべき「近現代史が貧弱」では民主主義があぶない！！**

【事実を埋め込む作業】　検閲で吹き飛ばされた「からし」をもとの位置に戻すこと。明治２年の新政府会議で、横井小楠が「信教の自由」と「賤民の廃止」を確実にしたという"人権"に関することが最初の手段だろう。歴史の俎上に載っても認められる。一般の人が、小楠の人間性と業績に関心を持つ素地、基盤となりうる。小楠の業績と坂本竜馬がフィクションであること、薩長同盟や五カ条の御誓文が固有名詞でないことなども同時に広めることも意味がある。いまやらねば、間違った歴史がはびこりつづけ日本の将来に再度禍根を残す。